

## 伝賀茂真淵撰『源氏物語十二月絵料』（翻刻）

岩 坪 健

源氏物語の中から十二ヶ月の絵になる場面を、賀茂真淵が選び出したと伝える『源氏物語十二月絵料』（埼玉県川越市立中央図書館蔵）を、全文翻刻する。参考までに、巻頭と巻末の写真を掲載する。翻刻および写真の掲載を許可していただいた当局に厚く御礼申し上げます。なお解題は、本誌の次号に収める。

本作品は岩坪ゼミで輪読し、担当者が翻刻をパソコンで入力した。当該学生は、次の通りである。

清田康晃 浅田磨央 篠原三穂 芳賀理紗 飯塚智絵  
正成由美子 小堀奈穂 林真帆 夏秋まどか

凡例

一、翻刻は原文のままを原則とし、誤字・脱字・当て字・仮名遣い等も底本の通りにしたが、読解や印刷の便宜を考慮して次の操作を行った。

① 底本の異体字・旧字体・略体は、通常の字体に改めた。

② 適宜、句読点を付けた。

③ 誤写かと思われる箇所には、右側行間に（ママ）と記した。

④ 見せ消ちは二箇所あり、末尾の跋文にあるのは、そのまま翻

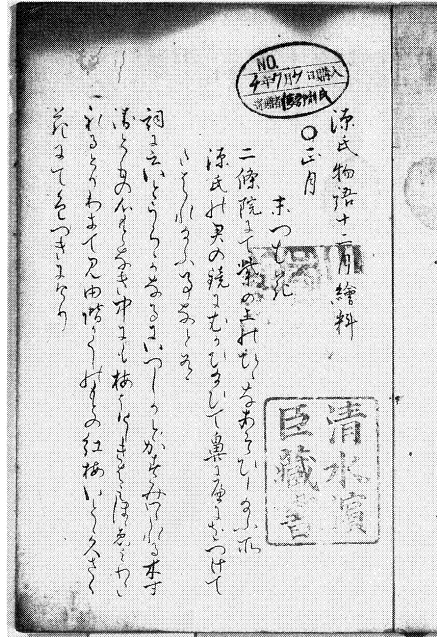
刻した。もう一箇所は九月・閨屋の巻の解説文にあり、「石山にまうて給はんと□□の箇所は、踊り字の「、」とも、平仮名の「に」（字母「尔」）とも読める。写した人が書き誤りに気づき「て」に直したと判断して、訂正後の本文のみ翻刻した。二、書いた文字を擦り消したり、消さずに重ね書きしたりした箇所はない。

三、月の初めに付けられた○印は、朱で記されている。

四、朱筆で書かれた文字は、一箇所だけある。それは九月・閨屋の巻の解説文で、「車をかきおろして」の「ろ」を朱で消して、右

巻頭

伝賀茂真淵撰「源氏物語十二月絵料」(翻刻)



横に「ろ」を朱書している。これは墨筆の「ろ」が判読しにくかつたからであろう。

源氏物語十二月絵料

○正月

末つむ花

二条院にて紫の上のひ、なあそひし給ふ所。源氏の君の鏡にむかひ給ひて鼻に、へにつけてたはれ給ふ事など有

詞に云、いとすら、かなるに、いつしかとかすみわたれる木すゑとも心のとなき中にも、梅はけしきはみほ、ゑみわたれる、とりわきて見ゆ。階かくしのもと紅梅いとく、さく花にて色つきにけり。

右の詞のうち、霞みわたれる梢のありさま、又、白梅のつほみたる、又、はや咲きの紅梅のありさまなどあるへし。又、はしかくしのさまなど、かきやうあらんか。

又、

初子

あかしの姫君の御かたにて、わらは、しもつかへなど、おまへの山に小松引きあそふ所。姫君のさま、女房あまたさふらふ所。源氏の君の居たまふさまも有へし。ひけ籠、わりこなと、もて来たれるさま。つくりもの、鶯をすゑたる五葉の枝に、文をつけたる所など有へし。

○二月

源氏の君、須麻(すま)に居給ふさま、海のけしきなど有へし。又、都より三位中将、来給へる事、此つ、きに有。中将と源氏の君と物かたりし給ふさまあるへし。

詞に云、二月廿日あまり、いにし年、京をわかれしとき云々。南殿

の桜は、さかりになりぬらん云々。

此前の詞に、わかきの桜の咲初てと有。

又、

椎か本

詞に云、ささらきのはつかの程に兵部卿宮、初瀬にまうて給ふ云々。

此時、初瀬にまうて給はむとて、宇治の八の宮の所によらせ給へる也。宇治のけしきを書へし。

又、詞に、はるくくと霞わたれる空に、ちるさくらあれは今ひらけそむるなど、いろくみわたさるゝに、河そひ柳のおきふしなひく水影云々。

八の宮の家居は、あしらの屏風、萱か軒など、事そきたるさまなるへし。

○三月

胡蝶

むらさきの上の春のおまへより、秋好の中宮の御方へ、わらはに蝶鳥の舞の装束させて、桜、山吹をかめにさして、もたせて奉り給ひし事、有。此所に、やよひのはつかあまりの頃とあり。こ、はさまく書事あるへし。

又、

花宴

詞に云、やよひのはつかあまり云々。やかて藤の花宴し給ふ云々。

こ、は右大臣の家にて、弓のけちにて、上達部、みこたち、つとひ給ひて、源氏の君をむかへる所也。をしき、つかかね、へいし、かはらけ、らいしなとやうのもの、とりならへたるかたあるへし。

○四月

蓬生

源氏の君、常陸宮をとひ給ふ所。

詞に云、おほきなる松に藤の咲か、りて、月影になひきたる云々。柳もいたうしたりて、ついちもさはらねは、みたれふしたり云々。御さきの露を馬のむちして、はらひつゝ、いれたてまつる云々。

又、

あふひ

六条の御息所の車あらそひの所。ここはかきやうにて、おもしらく侍るへし。

○五月

は、き木

源氏の君、方違にて、紀の守か中川の宿にやとり給へる所。こ

常夏

六条院の東の釣殿にて人々、逍遙し給ふ所。

、は雨夜のものかたりのつゝ、きにて五月也。詞に、やり水の事、  
螢とひちかひたるなどあれば、それらのさまを書へし。紀の守  
の兄弟、又、小君など、おほしきわらは、三四人、有へし。簾  
をへたて、空蟬のありさまをも書へし。酒、さかな、と、灯

詞に云、にし川よりたてまつれるあゆ、ちかき川の石ふしやうのも  
の、おまへにて、てうしまゐらす云々。せみのこゑなども、いとく  
るしけに聞ゆれば、水の上むとくなるけふのあつかはしさかなと有。  
このあゆ、石ふしなど、てうするさまなど、書やうあるへし。

台など、源氏の君のおまへのかたに有へし。

又、

又、池の蓮の花のさかりの事、わかなにも、まほろしにもあり。

花ちる里

六月の絵には、蓮のありさまかゝんも、よく侍るへし。

詞に、さみたれの空、めつらしう晴たる雲まに云々。さ、やかなる

家のこたち、よしはめるに、よくなることをあつまにしらへて云々。

○七月

かゝり火

こ、は中川の女の家のおまへを、源氏の君のすき給ふ所也。源氏  
の君の車と、め給へるさま、空には郭公の鳴て、すくるかた  
あるへし。

詞に云、秋になりぬ。初風す、しく吹出て云々。夕月夜はとくいり  
て、すこし雲かくる、けしき、をきのおとも、やうくあはれなる  
ほとになりけり。御ことを枕にて、もろともにそひし給へり云々。

○六月

夕顔

夕顔の宿のまへに、源氏の君の車と、め給へる所。

こ、は源氏の君と玉かつらの君と、ことを枕にてそひし給へ  
るやう、書やうあるへし。池にかゝり火のありさまを書へし。

此つゝ、きの文に、さ月のころほひより物し給ひし人なんあるへ

けれど云々とあれば、こ、は六月の事也。

又、

又、

明石

源氏の君、をかへの宿をとひ給ふ所。

詞に云、十三日の月、はなやかにさしいてたる云々。御馬にて、いて給ふ。惟光などはかりを、さふらはせ給ふ云々。歌に、秋のよの月毛の駒よわかこふる雲るにかけれときのまも見む

こ、は源氏の君、直衣にて、月毛の駒にのりたまひ、惟光、かちにて、狩衣すかたにて、御ともつかうまつるさまを書へし。

此つ、きに、七月廿よ日のほとに、又かさねて京へかへり給ふへきせんしくたり云々とあれば、この十三日の月は七月の十三日也。

○八月

野分

秋好の中宮のおまへに、色々の秋草をうゑさせ給へるを、八月、野分吹いて、それをあらしたる所。野分の吹たるによりて、夕霧の君の、紫の上をひそかにかいまみ給へる事あり。これなと書やうあるへし。

又、

夕霧

夕霧大将、小野にゆき給ふ所。山里のけしき秋草のやうなど、さま／＼書やうあるへし。

詞に云、八月中の十日はかりなれば、野へのけしきも、をかしき頃なるに、山里のありさまのいとゆかしければ云々。

又、宿木に、八月はかり源中納言の君の、あさかほの花を折て、中の君にみせ給ひし事あり。其あさかほを、扇の上へのせ給へる事なと有。八月の絵には、これなとも書やうあらんか。又、夕顔には、八月十五夜、夕顔のやとに源氏の君のやとり給ひて、あれたる家の月など、もりたるを、めつらしとおほしたる事、有。これも書やうあるへし。

○九月

関屋

詞に云、九月つこもりなれば、紅葉の色々こきませ、霜かれの草、むら／＼をかしうみえわたる、関屋より、さどくつれいてたる旅すかたのもの、色々のあをのつき／＼しきぬひもの、く、りのさまも、さるかたにをかしう見ゆ。

此所は、源氏の君は石山にまうて給はんとて、いてたち給ふに、空蟬は常陸よりのほるほどにて、あふ坂の関にて行あひ奉りて、杉の下に車をかきおろして、と、まれる也。こ、はさま／＼書こと、有へし。

又、

をとめ

秋好の中西より紫の上の御かたへ、紅葉、秋の花などをつみて、  
まゐらせ給ふ所。

詞に云、なか月になれば、もみちむらく、色つきて、宮のおまへ、  
えもいはずおもしろし。風うちふきたる夕ぐれに、御はこのふたに  
色々の花もみちをこきませて、こなたに奉らせ給へり。おほきやか  
なるわらはの、こきあこめ、しをんのおりものかさねて、あかくち  
はのうすもの、かさみ、いといたうなれて、らう、わたとの、そり  
はしをわたりてまゐる云々。

○十月

は、き木

木枯の女の宿に、殿上人の来たりたる所。残りの菊、紅葉のち  
るやうなど、殿上人の笛をふくさま、すたれのうちにて女のこ  
とひく所なと有へし。

又、

もみちの賀

朱雀院に行幸ありて、源氏の君と頭中将と、青海波をまひ給ふ  
所。

詞に云、かさしの紅葉ちりすきて云々。おまへなる菊を、りて左大

将さしかへ給ふ云々。

青海波まひ給ふ所は常にかきなれたれば、此かさしをさしかふ  
る所などをか、は、めつらしく侍らんか。

○十一月

薄雲

大井の里の冬のすまひのありさま、明石の上、入道の北方、姫  
君などを書へし。

詞に云、冬になりゆくま、に川つらのすまひ、いと心ほそさまざり  
て云々。

此つ、きに、うちなきつ、すくすほとに、しはすにもなりぬと  
あれは、はしめは十一月也。

又、

まほろし

詞に云、五せちなといひて、そこはかとなく今めかしけなるころ、  
大将との、君たち、わらは殿上し給ひてまゐり給へり云々。御をち  
の頭中将、藏人の少将など、をみにて、青すりのすかたとも、きよ  
けにめやすくて云々。

此青摺は新嘗会の時の小忌衣也。此ありさまなど、絵にはめつ  
らしかるへし。

○十二月

あさかお

雪まろめする所。こゝは常にかきなれたれば、絵の料にはいとよき所也。

又、

玉かつら

年のくれにかた〜へ、きぬをくはり給ふ事あり。源氏の君と紫の上と、きぬの色合など、さため給ふ所。このくはり給ふきぬなど、書やうあるへし。

詞に云、としのくれに御しつらひのこと、人々の御さうそく、やむことなき御つらにおほしおきてたり云々。

又、行幸に、大原野のみゆきの事、有。又、まほろしに、御仏名の事ありて導師に盃をたまふ事あり。これらなとも十二月の絵によく侍るへし。

縣居翁、伊勢物語、源氏物語との絵の料とて、おほくかきおかれたるあり。又さらに源氏物語のうちにて、十二月の絵料かき出られたるは、屏風絵などか、んためにとの心しらひにおはんけんかし。あな、みやひの心すさひや。

濱臣

卷末

